

を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。」のですから、福音が伝えられることが病人を癒すこととなったのです。言葉と癒しは切り離せないのです。

ペトロの姑がどれだけ主の言葉に触れていたかは書かれていませんが、当然生活の中でも、出かけて行って話を聞いたこともあったことでしょう。

山上の説教を語られた主が触れられたことよって姑は癒され、言葉よって悪霊は追い払われたのです。山上の説教の響きは人を健やかにするものです。きびしいところがあり、問われることの多いものです。

しかし、人が人間性を取り戻すためには、主の説教を受け止めることがなくてはならないのです。悲しみの中で祝福され、ひとりて祈り、赦し、愛すること、人が人であることは深くかわつていります。主イエスの言葉は真の回復をもたらすものです。主の語る福音と説教が病氣と患いを癒されたのです。

わたしたちの患いを負い、病を担い

この主の姿を福音書は旧約聖書の預言者イザヤ書五三章四節に書かれている「苦難の僕」の姿に見ています。そこには、ひたすら、痛みと苦しみを背負っている人物の姿、苦難を負って、病に苦しむ僕の姿があります。四節にはそれが「わたしたちの病、わたしたちの痛みであった。」というのです。さらに五三章五節には「彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」とあります。

苦難の僕の苦しみと病いの原因は自分たちが神に背いた咎、つまり罪のためだった。その懲らしめをこの苦難の僕が負ったので、自分たちは癒されたというのです。

主は権威ある力強いことを語り、それで特別な癒しの力を発揮したというのではなかったのです。むしろその姿は確かに「わたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」のだと確信させたのです。

負う、担うは身に受けることです。慈しみをもって語りかけてくださった主は、人の痛みを自分にも負われた。そこに旧約聖書の成就を見た。十字架の主を知ること神の言葉の実現が見えたのです。

取り戻すべき健やかさ

肉体の健康がすなわち健康ではないと思えます。健康な時にはかえって見えないものが多いのです。わたしは何人もの方の病床洗礼に立ち会い、あるいは病床を訪ねることがありました。するとそこでは普段ではできない、深い話ができます。元氣な時よりも人間らしい話ができるのです。

確かに痛みや苦しみは人をたたき、縛るものです。しかし、病氣や苦しみの中で、神の子であるイエス・キリストが苦しみを受けたことが、身近なものになるのです。イエス・キリストがまさに十字架で苦しまれたこと、そこには、わたしの苦しみが関わっている、わたしの罪と赦しが関わっていることが分かる、自分の今のこの苦しみもイエス・キリストの苦しみとは無関係ではない、むしろ、苦しみににおいて、主イエスとつながっていることが見えて来るのです。

神である主イエスと結ばれている。それこそ、わたしたちが戻らなければならぬとこそ、

ろ、本来のありかたなのです。神と人との回復は受難の主の十字架を知ることにあります。わたしたちが取り戻す必要があるのは神様との関係です。神はそのひとり子イエス・キリストを苦しみに渡され、わたしたちの苦しみに触れてくださったのです。

今日の箇所は主イエスが、苦難の僕に預言された揺るぎない旧約聖書以来の神の御計画であったことを示します。そして、主イエスのお姿、言葉と業と、存在そのものによって、実現し成就したことを証明しているのです。

このことをわたしたちが受け止め、自分のものにするには、主イエスの姿に親しむことです。聖書を読む意味はまさしくそこにあるのです。(二〇二二年四月三日 公同礼拝)

二月講壇一覽

第一主日(二月六日) 公同礼拝

「実を見分ける」 エレミヤ 一四・一三〜一六 高橋和人牧師

第二主日(二月一三日) 公同礼拝

「信仰の勘違い」 エレミア 一七・五〜八 高橋和人牧師

第三主日(二月二〇日) 公同礼拝

「岩の土台にこそ」 詩編 一一九・一三〇 高橋和人牧師

第四主日(二月二七日) 公同礼拝

「共に苦しみ、共に喜ぶ」 詩編 五・一二〜一三 姜涇米牧師

コリントⅠ 一一・一二〜二六